

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 6 月 16 日現在

機関番号：32689

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2016

課題番号：26580042

研究課題名(和文)オペラ映画の歴史とオペラ映像の将来

研究課題名(英文)The History of Opera Films and the Future of Opera Images

研究代表者

荻野 静男(Ogino, Shizuo)

早稲田大学・政治経済学術院・教授

研究者番号：80204105

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：ヨーロッパとアメリカにおけるオペラ研究に接し、多様な情報を得られた。ベルリン自由大学演劇学部およびアメリカ・イェール大学音楽学部にて1年間の研究滞在を行い、研究者との交流を通じて有益な情報を得るとともに、資料収集を行う。またアイルランド、イギリス、アメリカ、イタリアで開催されたオペラ関連学会に参加し、オペラ映画に関する研究報告を聴講し最新の研究動向を探る。さらにイタリアとスペインにおいてオペラ映画《ドン・ジョヴァンニ》ならびに《カルメン》のロケ地調査を敢行し、撮影の背景を調べた。具体的成果としては、口頭発表の他に論文や研究報告、著書がある。《ソクラテス》プロジェクトでオペラ演出の研究を行う。

研究成果の概要(英文)： I conducted research at the Institute for Theatre Studies of Free University Berlin, Germany and at the School of Music of Yale University, USA for one year. I could, therefore, collect informations on opera studies through the exchange with the colleagues there and gather material for this field. Furthermore, I attended conferences on opera studies in Ireland, England, USA and Italy. Through various lectures, I could investigate the latest trends of research in opera films. In addition, I carried out the investigations of the locations of opera films "Don Giovanni" and "Carmen in Italy and Spain. As concrete results of my research during 3 years there are oral presentations, papers, reports and a book. Furthermore, I was the leader of the "Socrate"-Project and made an investigation of opera-staging which will contribute to research in the direction of opera films.

研究分野：芸術学、ドイツ語圏文化

キーワード：オペラと映画の演出 ロケーション ハリウッド映画 ヨーロッパ映画 時代背景 地域性 映画監督

### 1. 研究開始当初の背景

(1)「オペラ映画」というジャンルについて、本邦ではこれまで研究はほとんど行われてこなかった。映画関係の和書を概観しても、オペラ映画に関する記述はあまり見当たらない。

(2) 海外では映画とオペラの関係性について今世紀初頭からすでに何冊かの書籍が出版されている。また、オペラ学専門誌の最近の号でも、オペラ上演の映像化に関する学術論文が掲載されている。

(3) 本テーマの着想に至ったのは、あるブック・プロジェクトのために「オペラ映画」という項目を執筆したことによる。

### 2. 研究の目的

(1) 本研究の目的は、「オペラ映画」というジャンルの歴史について考察を巡らし、その起源・発展・将来についてまとめた見解を打ち出し、『オペラ映画の歴史とオペラ映像の将来』(仮題)という一冊の書物を上梓することである。

(2) 考察の主たる対象は本ジャンルの映画制作の技術的発展、欧米の大衆社会における映画制作の社会・文化史的背景である。

(3) 時代的にはヨーロッパにおいて大量のオペラ映画が制作された20世紀の70年代および80年代に焦点をあて、そのニュー・ジャーマン・シネマとの関連も明らかにする。さらにテレビ中継やインターネット配信をも視野に入れ、オペラ映像の将来を記述する。

### 3. 研究の方法

(1) 特にドイツとアメリカ両国において制作されたオペラ映画について、ベルリン自由大学図書館ならびにイエール大学図書館所蔵の研究資料にあたる。平成26年度にサバティカルを取得したので、4ヵ月間をベルリンにて、8ヵ月間をニュー・ヘイブンにて滞在した。その間、欧州やアメリカの研究者との交流を通じ、オペラ映画に関する幅広い知見を得ることができた。ただ単に研究機関の図書室で資料を漁るだけでなく、研究者との交流を通して最新の情報を得るようにした。

(2) イタリアのヴェネツィアやヴェネト地方に赴き、ジョゼフ・ローゼ監督のオペラ映画《ドン・ジョヴァンニ》のロケ地であるパツラーディオ建築群を中心に調査を行った。またスペインのロンダ、セビリア、カルモナにてフランチェスコ・ローゼ監督のオペラ映画《カルメン》のロケ地調査も行う。各映画の撮影現場を訪れることにより、その下地となる郷土性や歴史的なものを把握しよう試みた。実際に現地に行ってみると、ただ映画を視聴するだけでは不明なものが一

拳に明らかになったのには驚いた。

(3) 実証的かつ哲学的著述を目指す。オペラ映画に関する単なる歴史的・文化史的事実を羅列することにならないよう、オペラ映画のなかの精神的なものを抽出することにも留意して研究を進めている。

(4) 歌劇場のステージ上演のオペラを演出の側面から研究し、オペラ映画の演出研究に活用するよう努めている。

(5) ドイツにおける1960~80年代のニュー・ジャーマン・シネマの映画作家たちが抱いていたオペラへの情熱を理解することにより、オペラが彼らの映画に与えたインパクトを明らかにしようと試みている。

### 4. 研究成果

(1) ヨーロッパとアメリカにおけるオペラ全般の動向を、各国の研究者との交流や、シンポジウム、学会発表等の聴講を通じてある程度知ることができた。これはやはり2014年度1年間の海外における研究滞在によるところが大きい。オペラ史やメディア論、映画史など、オペラ映画に限定されない、オペラに関する幅広い知見を得ることができた。かかるバックグラウンドを獲得することができたので、オペラ映画にアプローチする際にも、本研究開始時に比べると格段に障害が少なくなったように思われる。

(2) スウェーデンの映画監督イングマール・ベルイマンによるモーツァルトのジグシュピール《魔笛》の映画化について研究を行った。それによりモーツァルトがベルイマンの映画にいかに大きな影響を与えているかを知ることができた。さらにステージ上演の《魔笛》が持ちえない、映画ならではの魅力をベルイマンのオペラ映画《魔笛》は存分に示している。またヨーロッパ映画特有の精神性をこの映画もまた有していることがうかがえる。この点で本映画はアメリカ映画とは相違する。ただベルイマンの《魔笛》も同時代のハリウッド映画と同様のスペクタクル性を持っていることは明らかで、いわゆる娯楽映画の側面も発揮している。したがって本《魔笛》は精神性とエンターテインメント性の双方を有していることになる。その点、ヨーロッパのオペラ全般と変わらないことを確認できた。

(3) 「オペラ映画の歴史とオペラ映像の将来」という企画図書の執筆を見据えて、そのアウトラインを描く発表を口頭で行った。19世紀末の映画技術の発明・開発時点から21世紀の現時点までの映画化されたオペラについて述べるとともに、ステージ上演オペラのテレビ放映やインターネット放映についても触れ、日々刻々変化してゆくオペラ映像

の社会への放映・伝播方法の変化、発展についても、メディア技術的観点も考慮しつつ論じた。特にオフエンバックの《ホフマン物語》の映画化を例に取り、監督の手腕や手法によって同一の作品であっても、さばき方によって相当印象の異なる映画が出来上がることを明らかにした。またサイレント映画時代にすでに多数のオペラ映画が制作されていたことを指摘し、オペラが映画というメディアにいかに対応しい芸術ジャンルであるかも明白にしておいた。20世紀後半の1970年代、80年代においてヨーロッパで盛んに制作されたオペラ映画は、21世紀に入ると若干制作の勢いが落ちてきた感がある。しかし欧州特有の芸術ジャンルであるオペラが持つ文化的パワーは、たとえ一見鳴りを潜めたようであっても、相変わらずその本領を発揮する機会をうかがっているようにも思える。なぜなら舞台上演のオペラ自体が映像を演出に採り入れるなど、様々な試みを行っている現状を看取できるからである。こうしてオペラ映像は映画というメディアにこだわることなく、オーディエンスに向けて発信され続けているのである。

(4) 2016年3月前半には、イタリアのローマにてジャンフランコ・デ・ボシオ監督のオペラ映画《トスカ》のロケ地調査を行った。極めて短期間の調査であり、また費用関係の理由でガイドを雇えなかった調査でもあったので、本映画のロケ地として使用された現地歴史的建造物であるサンタンジェロ城やファルネーゼ宮、それにサンタンドレア・デッラ・ヴァッレ教会の特定に戸惑ったりしたために、遺憾ながら期待外れの調査に終わった。しかしカヴァラドッシが銃殺され、トスカが本オペラの終わりで飛び降りるサンタンジェロ城を実際に見学できたことは、このオペラ映画の理解に役立っている。ファルネーゼ宮は現在フランス大使館として使用されているので、内部に入ることはできなかったが、外部からその威容を確認することができたので、やはりデ・ボシオ監督の手腕に納得した。ステージ上演オペラとは異なり、オペラ映画ではリブレットに出てくる本物の建物を使用することが可能なので、それが観客に与えるインパクトは大きい。

(5) また2016年3月後半には、ジョゼフ・ローゼ監督のオペラ映画《ドン・ジョヴァンニ》のロケ地調査をヴェネツィアとヴェネト地方で行い、本作品の地方性と独自性を明らかにした。そもそもこのオペラの舞台はスペインのセビリア辺りを想定しているはずである。なぜなら主人公のドン・ジョヴァンニみずからその街の出身であり、また彼の元恋人のドンナ・アンナもスペインのブルゴスの出自であるからだ。しかしローゼのオペラ映画の撮影にはスペインのゆかりの都市が選択されたのではなく、イタリアのヴェ

ネツィアとその周辺のヴェネト地方が選ばれている。その理由を尋ねるために、ロケ地調査を行った。明らかになったのは、やはり《ドン・ジョヴァンニ》のリブレット作者であるロレンツォ・ダ・ポンテの出身地であるヴェネト地方を念頭にこのオペラ映画が制作されたということである。つまりこの映画では、ドン・ジョヴァンニはセビリアの貴族としてではなく、ヴェネツィア貴族として描かれているわけである。ドンナ・アンナを初めとする他の登場人物たちについても、この映画ではその家がかつてのヴェネツィア貴族のヴィラ（邸宅）となっていることから、彼らがセビリア貴族ではなく、ヴェネツィア貴族とされていることが判明する。たとえばドンナ・エルヴィーラの館はヴェネトのヴィラ・エーモであり、ドン・ジョヴァンニの家はラ・ロトンダなのである。こうしてローゼは舞台をスペインからイタリアに移すことによって、主人公をダ・ポンテの友人である色事師カサノバに置き換えていることが判明する。その他、ロケ地調査ではヴェネツィアというかつての都市国家ならびにヴェネト地方の人々の眼が南のローマ方面に向いているのではなく、むしろその北東地域であるオーストリアやスロベニア、さらにはアドリア海対岸に位置するクロアチア方面に向いていることが確認された。ヨーゼフ2世を君主とするかつてのオーストリアの宮廷になぜダ・ポンテが赴いたのか、その理由の一つが明らかになったように思う。またパツラーディオの建築によるヴェネツィア貴族のヴィラ群についても、広い知見を獲得することができた。本オペラ映画の構想者である当時のパリ・オペラ座芸術監督ロルフ・リーバーマンの制作方針についても、ある程度理解を得られたと考える。さらにこれはロケ地調査で判ったことの範囲外であるが、このオペラ映画が社会の一握りの上層階級をターゲットにして制作されたのではなく、広範な大衆を的に撮影されたことも付け加えておきたい。1970年代は21世紀の現代とは異なり、知識人たちがそうした姿勢を取っていた時代であった。映画自体にはヴェネツィアの波の音が一種の通奏低音のように響いている感があり、モーツァルトとダ・ポンテ、それにカサノバの生きた時代の不安定感を表しているようにも思われた。

(6) 早稲田大学オペラ/音楽劇研究所に次の4つのWorking Group (WG)を立ち上げた。

- 1) オペラ・ステージング
- 2) オペラ、メディア、テクノロジー
- 3) ヴァーグナーの総合的研究
- 4) オペラにおけるダンス

これは特にオペラ映画に限定したWGではないが、ステージ上演のオペラも含めてオペラという芸術ジャンルの持つ多様性を考慮して設立したものである。平均して5名程度の参加者があり、様々な角度からオペラにアプ

ローチしている。特に1)のWGの成果としては、2016年6~7月にかけて早稲田大学で開催した「オペラ《ソクラテス》・プロジェクト」がある。生誕150年を迎えたエリック・サティの交響的ドラマ《ソクラテス》を、講演会、ワークショップ、シンポジウム、本作の公演、クロージングイベント(公演のビデオ上映とトーク)などによって多角的に研究した。この際はイスラエル・テルアビブ大学音楽学部より、早稲田大学高等研究所を通じて、ミハル・グローバー=フリードランダー准教授を招聘して演出ならびにレクチャーを行っていただいた。ステージ上演のオペラと映画等メディアを通じて伝達されるオペラとの相違点・類似点などを確認した。とりわけ両者の演出や制作について考察を深め、両者の間には本来さほど違いは存在せず、舞台によって直接観客の眼と耳にアピールするか、あるいは映像と音声によって間接的に訴えるかの相違があるにすぎないことが判明した。その他のWGも徐々にではあるが、成果をあげつつある。ただし、2)の「オペラ、メディア、テクノロジー」WGのみは、時間的制約もあって、2016年度をもって閉鎖したが、いずれ再開しようと機会をうかがっている。

(7) 早稲田大学オペラ/音楽劇研究所が中心となって編集した『キーワードで読むオペラ/音楽劇研究ハンドブック』(アルテスパブリッシング発行)において仁井田千絵氏と共著で「映画」という項目を発表した。これは全部で5ページほどの分量しかないが、それでも本邦初のオペラ映画に関するまとまった記述と自負している。年代順にオペラ映画について述べるとともに、映画の哲学的考察も入れている。現在『オペラ映画の歴史とオペラ映像の将来』(仮タイトル)という著書を執筆中であるが、それはこの小さなアティクルを出発点としている。この『ハンドブック』においてオペラ「映画」の他に「モーツァルト」、「リヒャルト・シュトラウス」、「ジグシュピール」(長谷川悦朗氏との共著)の3つの項目を発表している。

(8) 2017年3月中旬にドイツのフランクフルト、マンハイム、ハンブルクを訪問し、それぞれの歌劇場にてオペラを観劇して演出と制作について調査した。従来のオペラ映画の演出と制作という過去の側面、ならびにオペラ映像の展望という将来的側面を考察する際に、今回の調査結果が役に立つものと思われる。

(9) 2017年3月末から4月初めにかけてスペインのアンダルシア地方を訪れ、フランチェスコ・ロージ監督のオペラ映画《カルメン》のロケ地調査を敢行した。今回も現地ガイドを雇っての調査旅行であったため、非常にスムーズに研究調査を行うことができた。予め

ガイドに頼んで事前に調査ルートを作成してもらっていたので、極めて効率的にアンダルシア地方のロケ地を自家用車で周回することができたのである。本オペラ映画の撮影に使用されたロンダ、セビリア、カルモナの市街地を探索し、写真撮影も行った。同地に行く前にはよく理解できなかった映画の諸場面は、同地に実際に立ってみると簡単に理解できたので、驚いた。やはり現地の空気や自明な慣行、歴史的側面を知っていなければ、このオペラ映画《カルメン》は本当の意味では理解不可能であることを痛感した。たとえば主人公カルメンがタバコ工場の同僚と水浴びする場面に使用されている施設が、元来は昔イスラム教徒がアンダルシア地方を支配していた頃のアラビア風呂の遺跡であることは、このオペラ映画のどこにも説明されていないし、そのDVDのブックレットにも出ていない。こうした事は現地に行って初めて明らかになったのである。さらにはこの映画に出てくる闘牛場の非常に印象的な土の色が、実は映画全体の基調となる色であることも、実際にロンダやセビリアの闘牛場の土の色を見た者でなければ、分からないであろう。かかる例からも判明するように、ロケーション撮影制作のオペラ映画を真の意味で理解するためには、ロケ現場にみずから実際に立ってみることが必須の前提なのである。この意味で本調査旅行はロージ監督の《カルメン》の研究に大変有益なものであった。このスペイン調査旅行については、後日研究ノートなどの形で公にしたいと思っている。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

荻野 静男、研究ノート: ジョゼフ・ロージ監督のオペラ映画《ドン・ジョヴァンニ》のロケ地調査、早稲田大学政治経済学部「教養諸学研究」、査読無、第142号、2017、pp.113-122

荻野 静男、イングマール・ベルイマンによる《魔笛》の映画化、早稲田大学政治経済学部「教養諸学研究」、査読無、第138号(2014年度・2号) 2015、pp. 27-41、[https://waseda.repo.nii.ac.jp/index.php?action=pages\\_view\\_main&active\\_action=repository\\_view\\_main\\_item\\_snippet&index\\_id=813&pn=1&count=20&order=7&lang=japanese&page\\_id=13&block\\_id=21](https://waseda.repo.nii.ac.jp/index.php?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_snippet&index_id=813&pn=1&count=20&order=7&lang=japanese&page_id=13&block_id=21)

〔学会発表〕(計 5 件)

荻野 静男、「サティ《ソクラテス》公演の意義」、早稲田大学・テルアビブ大学共同企画「オペラ《ソクラテス》・プロジェクト」クロージングイベント 《ソクラ

テス》上映会とアフタートーク、早稲田大学オペラ / 音楽劇研究所 2016 年 7 月研究例会、早稲田大学小野記念講堂  
<https://opera-and-music-theatre.jimdo.com/過去の研究例会の記録/オペラ-ソクラテス-プロジェクト/> - クロージングイベント - ソクラテス-上映会とアフタートーク /

荻野 静男、「エリック・サティとその時代 基礎情報」, 早稲田大学・テルアビブ大学共同企画「オペラ《ソクラテス》・プロジェクト」シンポジウム『サティ《ソクラテス》上演に向けて』, 早稲田大学オペラ / 音楽劇研究所 2016 年 6 月研究例会、早稲田大学大隈記念小講堂  
<https://opera-and-music-theatre.jimdo.com/過去の研究例会の記録/オペラ-ソクラテス-プロジェクト/> シンポジウム-サティ-ソクラテス-上演に向けて /

荻野 静男、「ジョゼフ・ロージーのオペラ映画《ドン・ジョヴァンニ》におけるパラーディオ建築」, 早稲田大学オペラ / 音楽劇研究所 2016 年 4 月研究例会、早稲田大学 26 号館 1102 会議室  
<https://opera-and-music-theatre.jimdo.com/過去の研究例会の記録/2016年度/>

荻野 静男、「オペラ映画の歴史とオペラ映像の展望」, 早稲田大学政治経済学術院ファカルティ・ワークショップ、早稲田大学政治経済学術院 3 号館第 1 会議室、2016 年 1 月 27 日

荻野 静男、「世界のオペラ研究の動向 2014 年度在外研究の体験から」, 早稲田大学オペラ / 音楽劇研究所 2015 年度 4 月研究例会、早稲田大学国際会議場共同研究室 (7)、2015 年 4 月 18 日  
<https://opera-and-music-theatre.jimdo.com/過去の研究例会の記録/2015年度/>

〔図書〕(計 1 件)

荻野 静男 他、アルテスパブリッシング、キーワードで読むオペラ / 音楽劇研究ハンドブック、2017、450

〔産業財産権〕

出願状況 (計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況 (計 件)

名称：  
発明者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等  
早稲田大学研究者データベース  
<http://researchers.waseda.jp/profile/ja.1b25db066e199450fe0fbda67b117cba.html>

オペラ《ソクラテス》・プロジェクト  
<https://opera-and-music-theatre.jimdo.com/過去の研究例会の記録/オペラ-ソクラテス-プロジェクト/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

荻野 静男 (OGINO, Shizuo)  
早稲田大学・政治経済学術院・教授  
研究者番号： 80204105

(2) 研究分担者

( )

研究者番号：

(3) 連携研究者

( )

研究者番号：

(4) 研究協力者

1) 舘 亜里沙 (TACHI, Arisa)  
東京藝術大学・音楽学部教育研究助手

2) 笠原 真理子 (KASAHARA, Mariko)  
東京大学・大学院人文社会系研究科文化資源学研究室・博士課程